

vol.28

2012
AUTUMN

これからは、「男女」が「共同」して
仕事に、学校に、地域に、家庭に
「参画」していく時代です。女性も
男性もお互いに自立した良き
パートナーとして、イキイキ暮ら
せる佐賀市をつくりましょう。



Passport

佐賀市男女共同参画情報誌
ぱすぽーと

C · O · N · T · E · N · T · S

特集 外国人から見た男女共同参画 p2~5

“輝いている人”にインタビュー p6

株式会社コミュニティジャーナル(えびすFM) 代表取締役 池田真由美さん

佐賀市男女共同参画協賛事業所紹介 p7

佐賀市平松清風大学での授業 p8

「男女共同参画を家庭から広めよう」

佐賀市男女共同参画課

特集 外国人から見た男女共同参画

佐賀に住んでいる様々な国の方に、男女共同参画に関連するお話を聞いてみました。私達の住む佐賀と比べてどうでしょうか？



中国出身 りゅう さん さん 劉 珊珊さん

8年前に佐賀に来られた劉さん。現在は日本語学校での講師や企業での中国語の指導、国際交流協会での活動など幅広く活躍されています。



劉さんの経営するお店でのインタビュー

Q. 「夫が外で働き妻は家庭を守るべき」というような固定的性別役割分担意識はありますか。

A. 昔はそういった考え方があったように思いますが、1950年代くらいには共働きが普通になってきたので、現在ではあまりないと感じます。子どもの教育についても男女の別はなく、その子の能力を見て決めることが一般的です。

Q. 夫婦の家庭での役割分担はどうなっていますか。

A. 料理も洗濯も何でも平等に行っていますね。ほとんどが夫婦共働きなので、男性も家事全般をやることはとても普通のことです。家族のために誰かがやらなければいけないので、線引きはしていないのが一般的です。

Q. 子どもが生まれると女性が働き続けるのが難しくなるような状況がありますか。

A. 子どもを生んでも仕事を辞めるようなことはありません。多くの場合、祖父母が近くに住んでいれば孫の面倒を見てもらいます。中国にも託児所などがありますが、日本のように早くから預ける習慣がありません。早くても2、3歳くらいの、きちんと座って、1人でご飯を食べられるようになってから預けることが多いです。

また、以前は産休の取得期間は大体1年くらいで

したが、現在では6、7ヶ月程度と短くなってきています。

ただ、日本とは異なり、昼休みが12時から2時までと長いため、家に帰ってご飯を食べて子どもの面倒を見てから職場に戻ることができるので、職場復帰が早くなっているのかもしれない。

Q. 日本と中国で何か違う部分はありますか。

A. 日本の定年は男女共に60歳というところが多いようですが、中国では男性と女性の定年の時期が異なります。大学教授や公務員であれば男性は60歳、女性は55歳です。工場やその他企業であれば定年時期はもっと早い場合が多いです。

Q. 日本と中国で違うことで驚いたことはありますか。

A. 日本では結婚したらどちらかの姓を名乗ることには驚きました。中国では結婚しても姓は変わりません。子どもは家長である方の姓を名乗り、それは男性のほうが圧倒的に多いですね。姓が変わるとその家庭に入れてもらったという気持ちになるので一体感があり良いところもありますが、自分の元々の姓がなくなってさびしく感じることもあります。

インタビューを終えて 男性も普通に料理、洗濯、子どもの面倒など家事全般をやるという話にはとても驚きました。最近育児や家事をする男性のことを「イクメン」や「カジダン」と呼んで、テレビや雑誌でも取り上げられています。しかしながらそういった男性が少ないために話題になるのではないのでしょうか。日本でも共働き世帯は増加しています。男性も女性もお互いを思いやる行動を今まで以上にとれたらいいと感じました。

(野口 瞳)



メキシコ出身 村川 カルミナさん

大学で国際法律を学んでいた村川カルミナさん。日本に来て32年、現在では看護学校で生命倫理学を教えたり、通訳として活動されています。



村川さん お孫さんと一緒に

Q. 「夫が外で働き妻は家庭を守るべき」というような固定的性別役割分担意識はありますか。

A. メキシコでは男性は台所に立ってはいけないというような考え方がありましたし、妻は夫や父を非常に尊敬して立てていました。昔は女性が自分の夫を心から尊敬していて「lord」(神)という言葉で「夫」というニュアンスで使用することがありました。これは言わされて使うものではなく、尊敬の念で自ら使用するような言葉です。ただ、逆に男性から女性に言うような言葉はありません。

Q. 夫婦の家庭での役割分担はどうなっていますか。

A. メキシコではスペイン系メキシコ人が多く、宗教ではカトリックの人が多いです。そのような環境の中で育てられ、「男性と女性がこの世の中にお互いに助け合うために存在している」というように教えられました。それがいい意味での役割分担だと思っているので、子どもにも伝えていきたいですね。

夫は日本人なので、最初は男だからこうするべき、女だからこうするべきという考えがあったようですが、徐々に私の考えを理解してくれて、お互いがいないと家庭や色々なことが回っていかないと気づいてくれたようです。

Q. 女性の社会進出についてはどうでしょうか。

A. 社会進出する女性は徐々に増えてきました。現在では50%位はいるのではないのでしょうか。両親がフルタイムで働きに出て子どもが家に残るため、今まで発生しなかったような家庭での問題というのも発生し

てきているようです。

Q. 子どもが生まれると女性が働き続けるのが難しくなるような状況がありますか。

A. よほど厳しい状況でない限りありませんね。私がメキシコにいた頃(30数年前)でも、大きな企業などでは会社の中に子どもを預けられるような施設がありました。今では辞めなくても働ける環境が更に整っていると思います。

Q. 国際法律に興味を持つきっかけは何かあったのでしょうか。

A. 私が12、3歳の頃、道端で自分達の作った織物や焼き物売っている人に値段を聞いたところ数字が分からないと言われました。貧しくて学校に行けず教育を受けていないので、数字や計算という概念が分からないとのこと。びっくりしていると周りの人たちは適当な金額を渡せばいいと言いましたが、それではこの人たちが正しい報酬を得られずかわいそうだと感じました。

人種差別は少ないですが、こういう状況があり、それが大学で国際法律を学ぶきっかけでした。今でもまだそういう方たちはいらっしゃるの、別の形で自分が帰国した際など、自分が貢献できることをやっています。

インタビューを終えて 初めてお会いしましたが、なんでも語り合えるというような楽しい雰囲気でした。日本人との結婚を心配する両親を、自分の希望を実現するために、親の気持ちを察しながら、丁寧に説得し、理解と支援を得て、日本語を学び、日本の生活に馴染んでいくという姿。そして、主体性を保ちながら、祖国と日本の長短を見究め、自力で幸せを獲得されている姿は素晴らしいですね。カルミナさんのように、人権意識を身につけ、誰と出会いどこで暮らそうとも、共に幸せに生きていけるというのが男女共同参画社会と確信しました。

(中溝 末大)



イタリア出身 ジョルダノ・カルロさん

2012年4月に佐賀に来られたジョルダノ・カルロさん。現在では佐賀県国際交流協会ではイタリア語とフランス語を教えておられます。

Q. 「夫が外で働き妻は家庭を守るべき」というような固定的性別役割分担意識はありますか。

A. イタリアの北部と南部では考えなど様々なことが大きく異なります。私の出身は北部のクレモナ市ですが、現在は経済が良くないということもあり、夫婦共働きをしなければならない状況にあるため、固定的性別役割分担意識はかなりなくなってきているように感じます。ただ、南部の方はまだそういった意識は北部に比べて残っているのかもしれない。

この意識の変化というのは、啓発活動の結果でしょうし、経済的にそうせざるを得ない、という状況のせいでもあると思います。

Q. 夫婦の家庭での役割分担はどうなっていますか。

A. 男性の側にはやろうという意識はあるようですが、実際は女性の負担が多いようです。特に料理など日常的事はまだまだ女性が行っていることが多いですね。ただ、私の印象では子どものお迎えや料理などイタリアの男性の方が日本の男性よりもやっているように感じます。

イタリアではそれほど高くない金額でお手伝いさんのような方をお願いできる制度があり、例えば1、2時間ほど来てもらってお掃除だけやってもらうようなことも利用できるのですが、共働きのところはそういった制度も利用できると思います。

Q. 子どもが生まれると女性が働き続けるのが難しくなるような状況がありますか。

A. 子どもができたので仕事を辞めるというようなこと



ジョルダノ・カルロさん(左)
インタビューはご家族全員で受けていただきました。

はあまりありません。

日本と同じで共働きであれば保育園などに子どもを預けるということもあります。ただ、育児休暇などを取って仕事に復帰すると、職場の人から「もう育児休暇は取らないで欲しい」と言われたり、育児休暇を取る前にしていた仕事に戻ろうとしてもなかなかそこに戻ることができなかつたりといったように、問題が何かしら起こっているということは聞きます。

その他に、そもそも常勤の職がないために非常勤で働いている女性も少なくありません。そういった人たちは育児休暇をとることができないという問題もあるようです。

Q. 結婚後に親と同居する人は多いのですか。

A. イタリア北部では親が高齢になって1人暮らしになったというような場合を除き、同居するということは滅多にありません。スープが冷めないような距離に住んで、子育てを助けるというようなことはあります。南部は親と同居するような家族がまだあるかもしれませんね。とはいえ、大都市では近くに住むことが難しいことあるので、親と同居するにしても大都市ではない地域になると思います。

インタビューを終えて 固定的性別役割分担意識についてイタリアでは南部・北部で違いがあり、日本の「都会と農村」の意識と重なるものがありました。社会状況などの変化などにより、少しずつ意識にも変化が出てきているそうです。特に男性の家事への関わりは多いと感じました。

(森永 美智子)



アメリカ出身 アレックス・バーニーさん

2011年の7月から国際交流員として佐賀に赴任して来られたバーニーさん。毎月発行の市報「アレックス・アドベンチャー」というコーナーを担当されています。



アレックス・バーニーさん

Q. 「夫が外で働き妻は家庭を守るべき」というような固定的性別役割分担意識はありますか。

A. どこに行っても一般的な家族、特別な家族があると思いますが、アメリカでは50年前とは違って、現在では随分男女平等に暮らしていると思います。私の家は両親が共働きでしたので、ベビーシッターが私達(子ども)の面倒をみていました。日本と違ってベビーシッターは一般的で、近所に住んでいる高校生などにアルバイトで短時間の外出の間だけ頼むようなものから、日中フルタイムで来てもらうようなプロのベビーシッターもいます。

Q. 夫婦の家庭での役割分担はどうなっていますか。

A. アメリカ人はその時々で必要と思うことを進んで行うので、男性も家事や子どもの面倒を見ますよ。ただ州や地域によって宗教や信仰、価値観も異なるので、その家族次第ではあります。

Q. 子どもが生まれると女性が働き続けるのが難しくなるような状況がありますか。

A. 子どもを預ける保育園のような所も色々ありますし、市役所等の窓口に行けば様々な制度もあると思いますので、「子どもの面倒をみなくてはならない」という理由だけで、働くことができない人がいるということはないと思います。

また、アメリカでは年齢差別にあたるとして定年が存在しません。同じような考えで、子どものいる人が

子育てのために早退や休みを取ることを、特別な事情のない人と同じ扱いを受けることは、かえっておかしいと考えるかもしれません。

日本では周りの雰囲気を感じて「こうしなければ」とか「こうしてはいけない」と自分を制限しているように見えます。アメリカでは周りがどう思っているかある程度気にしますが、そういった点に関してアメリカの方が柔軟性があると思います。

Q. 女性の就労状況や社会進出はどうですか。

A. 専業主婦も勿論いますが、働く女性は多いと思います。アメリカの北部と南部では考え方が異なり、北部のほうが子どもを生んでも働きたいと考えている人が多いように思います。

ただ、昔と比べて男女平等が進んできたとはいえ、同じ仕事をしていても男性と女性で賃金が異なるという問題や、男性に比べて指導的な立場の女性が少ないといったことは存在します。

インタビューを終えて 達者な日本語で明るく応じてくださいました。私にとっては知ってる様で知らない国、アメリカ。子育て環境では「ベビーシッター(赤ちゃんに限らず)」の存在も一般的だそうで、やっぱり映画等で見るとは本当なんだ!と思いました。「自由・平等」のイメージですが、男女間の賃金格差や指導的立場にある女性が少ないなど、目には見えない「ガラスの天井」がまだまだあるのだそうです。パワフルなバーニーさんのお母様は、お父様(バーニーさんの祖父)の女性に対する考え方とよく衝突されていたそうです。世代間の考え方の違いって、どの国でも同じなのかなと思いました。

(大江 登美子)

“輝いている人”にインタビュー

株式会社コミュニティージャーナル(えびすFM) 代表取締役 **池田真由美さん** (佐賀市出身)

仕事に追われ、家事に追われ、時間に追われる暮らしの中で、ふと人生を振り返ったときに、今の自分でよいのかと考えることはありませんか？今回の“輝いている人”は、今年5月に「えびすFM」(コミュニティーFM)を立ち上げた池田真由美さんです。

池田さんは、日本ケーブルテレビ大賞を受賞するなど、以前は、北九州市のケーブルテレビ局で活躍されていました。その充実した前職を辞めてまで、なぜ、佐賀でラジオ局を開局することになったのか・・・

多くのメディアの中からラジオを選んだ理由や仕事に対する熱い思いなどについてお伺いしました。

えびすFMを開局することになったきっかけなどについて教えてください。

以前は、北九州市にあるケーブルテレビの会社に、番組の制作もしつつ、管理職として勤めていましたが、50歳からの10年間をどう生きるのか、何をするのかと真剣に考えたとき、自分はずっと現場で仕事したいという思いがありました。しかしその思いは会社の方針とは違っていました。「市民が情報発信できるメディアをつくりたい！自分の人生の中で唯一やり残したことはこれだ。」そう思ったとき、自分がトップにならなければ、自分の目指す会社はつくれなないと考えました。

コミュニティーFMは、「市民が情報発信できる」「災害時であっても機能する」メディアだと思っていますが、それはまさに私がやりたいことと一致していました。「コミュニティーFMを通じて、佐賀の街を元気にしたい。」そういう思いから「えびすFM」を立ち上げました。

池田さんにとってラジオとはどういうものですか。

ラジオはただ情報を伝えるだけでなく、リスナーが参加して一緒に何かをやっていくきっかけづくりになり、地域や人々を元気にしていくことができるものだと思います。

テレビは不特定多数の人を対象にしますが、ラジオはパーソナルに働きかけるもの。ラジオには一人一人の心に訴える力があると思っています。

外から見た佐賀の女性をどう思いますか。

佐賀の女性は年齢に関係なく、若い世代でも高齢になっても社会の中に身を置こうとしている人が多いと感じました。こういったことは他のところではあまりないように思います。実際行動に移すかは別にして、色々やってみたい！という意欲があることが大事ではないでしょうか。佐賀の女性はがんばっていると思います。

仕事への向き合い方についてどうお考えですか。

働くことに、男性も女性も関係ないと思います。社員もアルバイトも契約社員もどんな立場でも働くことは同じです。同じ志をもって働くことが大切だと思います。

自分の人生の中で「働くこととは何か」という位置づけをはっきりさせ、「どう生きたいのか、何をしたいのか」、自分ともっと真剣に向き合って、自ら選択していくことが大切ではないでしょうか。



池田 真由美さん

インタビューを終えて 自分がどう生きたいのか自分自身と真剣に向き合って、自ら選択していくことが大切という話は身につまされました。お話をたくさんうかがったのですが、今回全てをお伝えすることができず残念です。(野口 瞳)

えびすFMの番組は一日の佐賀市近郊のイベント情報等はもちろんの事、美味しいランチのお店紹介から流行の音楽、昔懐かしいカラオケソングなど私たちに身近なものが沢山あり、テレビや新聞と違って家事をしながらでも聞くことができるのでよく流しています。また、この夏の大雨・台風情報等の自然災害時に機能するメディアとしても活躍しています。今後も地域のリスナーに向け色々な情報を発信し続けて欲しいと思います。

(今泉 正子)

男女共同参画推進協賛事業所 紹介

市とともに男女共同参画の推進に積極的に取り組んでいただいている協賛事業所。そこに働く皆さんの声や事業所の取組内容を紹介します。

協賛事業所 募集中

*応募用紙はホームページから取り出せます

⇒ <http://www.city.saga.lg.jp/contents.jsp?id=16272>

株式会社ミゾタ

一般機械器具製造業

当社は働きやすい職場環境の整備のために育児・介護休暇制度をいち早く導入し、現在まで述べ16名の方が利用しています。一斉有休などによる有休取得をはじめ、ボランティア活動への支援や作業時間の繰上げなど社員個人はもちろん、家族との時間も大切にできるように配慮しています。



株式会社ミッド佐賀

サービス業

ポスティングをしている会社です。みなさん仕事と家庭を両立し頑張っている姿を見て、相手への思いやり、困ったときは助け合いながら楽しく仕事ができる職場です。これからも男女協力して、働きやすい環境づくりに取り組んでいきたいと思っています。



聖徳ゼロテック株式会社

生産用機械器具製造業 (プレス金型・プレス製品)

育児休暇を取得し、仕事に復帰しました。復帰後は、子供のことで遅刻や休むことが多く色々な面で不安もありましたが、社長はじめ上司や同僚に励まされ、色々助けられながらですが、頑張ることができています。子育てをしながら、楽しく仕事ができるこの職場に感謝しております。

(山本 真弓さん)



フラワー花友

小売業

スタッフが全員女性です。接客・製作作業など、すべて行ってもらっていることもあり、女性が働きやすく、楽しく、イキイキと輝いてもらうことを大切にしています。また女性スタッフがキャプテン・副キャプテンとして活躍してもらっています。結婚・産休後の復帰や希望休暇等を推奨しています。



神代整形外科

医療業

男女共同参画の推進に取り組むために、まず、現状把握と従業員の定着のために、従業員全員にアンケート調査と個別面談を行い、業務スキルの把握を行いました。働きやすい職場づくりとして、

毎週木曜日と土曜日は残業しないことにしました。そのほか、残業するとしても1時間以内とすることをしています。



江頭秀治商店

金属回収卸売業

家族のための休暇取得、早退等に柔軟に対応しています。家族でのコミュニケーションの時間を多く持つように、定時退社を促進しています。

(前号でご紹介しておりましたが、業種に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。)



佐賀市平松清風大学での授業

「男女共同参画を家庭から広めよう」

私は、平成23年度「日本女性会議2011松江」に参加する機会があり、福祉に関わる仕事をしていることから、分科会では「超高齢者社会を切り拓く」を選択しました。それをきっかけに、現在、私の勤務する佐賀市平松老人福祉センターで運営している、高齢者を対象にした「佐賀市平松清風大学」に、男女共同参画に関する授業を取り入れたことを紹介いたします。

授業は、平成24年度の佐賀市平松清風大学の1年生のカリキュラムに「男女共同参画を家庭から広めよう」というタイトルで設定し、平成24年6月5日(火)に授業を実施しました。

授業の概要は、まず、佐賀市男女共同参画ネットワークのメンバーによる「平松さんちの空もよう晴れたりくもったりちょっと心配ね」という寸劇がありました。内容は、家庭における男女の役割や、男女が対等なパートナーとなるのを阻む習慣等の身近な問題でした。授業に参加した学生の方にも特別出演させる等の演出もあり、楽しくそしてユーモラスに富んだ内容で、高齢者の方々にも非常に分かり易い工夫をしていただきました。

その後、65名の皆さんを6つのグループに分け、寸劇に参加されたメンバーの方々もグループの中に加わっていただき、寸劇を見ての感想や、



自分の家庭や地域を振り返りながら、男女共同参画のありかたについて熱心にグループで討議をされ、出された意見をまとめて各グループの代表に発表していただきました。

私が、この授業をとおして感じたことは、高齢者の方々が、この授業をきっかけに、自分の家庭と他の家庭における「男と女のあり方」の違いを知ることにより、改めて、夫婦や親子の関係を考える機会になったと思うと同時に、男女の性別を超えたお互いを思いやる心や、譲り合いの気持ちがあれば、自ずと男女共同参画社会は進んでいくものと感じました。

そして、この授業に参加された多くの方々から、「改めて男女の関係を考える機会となり、とても楽しい授業だった」との評価をいただき、来年度以降も、この、男女共同参画に関する授業は継続していくことが必要だと感じました。

(園田 恭子)



編集後記

今回の特集で様々な方にお話を聞くことができました。日本では第一子の出産を機に働く女性の約6割が退職しています。今回お話を伺った国では仕事を辞めるというようなことはほとんどないとのことでした。それを実現するためには、企業や社会、家庭での協力が必要不可欠です。

また、国や社会状況が違って、男女がお互いを認め合い協力し合う「男女共同参画の視点」を持つ大切さは同じであると感じました。

編集委員 今泉 正子・大江登美子・北島 常子・中原 正彦・中溝 末大・森永美智子・松本 康子・園田 恭子

「ばすぽーと」に関する
ご意見・ご感想をお寄せください

発行

佐賀市企画調整部男女共同参画課
〒840-8501 佐賀市栄町1番1号

[TEL]0952-40-7014

[FAX]0952-29-2095

[URL]<http://www.city.saga.lg.jp/>
(佐賀市役所HP)

[E-mail]danjokyodo@city.saga.lg.jp